

『ハムレット』における亡父との連帯
—悲劇の中に見られる未来性—

飯島 昭典

はじめに

ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の書いた戯曲の中で4024行という最も長い作品である『ハムレット』(Hamlet, 1600)¹はシェイクスピアの他のどの戯曲よりも分析され、議論されてきた作品であり、何世紀もの間『ハムレット』に取り組む事が演出家、俳優、学者にとって通過儀礼となってきた。400年以上たった今でもこの作品が我々を引き付けてやまないのは、古典的な悩みを提示しているのと同時に現代にも通じる苦境を鮮やかに映し出しているからであろう。主人公のハムレット(Hamlet)が表す心理の謎は、まだ多くの議論の出発点を生んでいるのである。

『ハムレット』は悲劇であり、主人公の死によって幕が下りる作品である。この意味でこの作品は楽観的なものではなく、悲劇が悲劇たる由縁であろう。しかし、ハムレットは悩んだ末の行動、そして続く死によって実現したものは何もなかったのだろうか。『ハムレット』、いやシェイクスピア劇の中で最も有名な台詞「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」("To be, or not to be—that is the question") (3.1.57)の悩みによって実現できたものは何もないのだろうか。これが本稿の出発点である。

ハムレットの悩みの本質を分析したりサ・ジャルダン(Lisa Jardine)はハムレットの母ガートルード(Gertrude)とハムレットの父老ハムレット(Old Hamlet)の關係に注目している。「ガートルードは再婚し、文字通り息子と老ハムレットの名を遠ざけたのだ。そしてハムレットによる彼女がクローディアスの床を離れるべきだという要求を、全く受け入れないのだ」("Gertrude has participated in the remarriage—has literally alienated her son, and Oldhamlet's name and does not apparently accept Hamlet's

urging to leave Claudius's bed ") (209)としている。彼女は自分の母が自分と父を忘れていたという母主導によるハムレットの現在の悩みを説明している。モリス・ウェイツ (Morris Weitz) はリッツ (Lidz) の評を説明しながら、このように述べている。「リッツは主人公を対応する人物として扱い、劇を成人した息子の死んだ父に対する反応に関する考察として読んでいる。普通の精神分析家とは違いリッツは過去よりも現在の重要性を強調している」 ("Lidz treats the hero as representative and reads the play for its insights into the reaction of a grown son to the death of his father. Unlike orthodox psychoanalysts, Lidz stresses the importance of present rather than past ") (282) とし、ハムレット自身の主導による父の不在という悲しみを説明している。母による自分と父の忘却であれ、父の不在という自身の悲しみであれ、ハムレットの悩みの本質は現在にあるとする上の二人の批評家である。それゆえ、グラハム・ブラッドショー (Graham Bradshaw) が述べるように、母の再婚と父の不在という現在の悩みである「ハムレットの最も深い反動的な問題は、王を殺す事によっても決して解決されないのである」 ("Hamlet's most profoundly representative problems could never be resolved by killing the king ") (120)。

ハムレットの悩みの本質である現在は、彼の一連の行動の結果によって、未来を感じさせる解決をもたらすものである、という事をこの論文では説明したいと思う。ハムレットが何も実現しないのではなく、未来に続くものを実現したという事をここで明らかにする。ハムレットは一体何を実現したのだろうか。この目的を明らかにするために本稿第1節では現王クロードィアスに対する復讐の性格を明らかにし、真実を発見し不透明なものから明るみに至るのが本質であると結論付けたいと思う。そして第2節では解釈の分かれる先ほど挙げた

第3幕第1場57行の(“ To be, or not to be—that is the question ”) (3.1.57)の訳が作品のテーマを考えるならば「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ」よりも「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」という古典的な訳が適切であるという事を証明して、本稿の論題に答えを出したいと思う。未来という言葉が、この論文でキーワードとなってくる。

1. 復讐の本質

『ハムレット』が復讐の劇である事は疑いようがない事実である。ハムレットが一連の行動を起こすのは、先王の亡霊がハムレットに自身の謀殺を告げ、父の仇を討つことを息子ハムレットに頼むからである。そしてこの劇を復讐の劇とする理由にはもう一つの要素がある。それは結果的にデンマークを統治するのがフォーティンbras (Fortinbras)になるからと言えるであろう。フォーティンbrasは先王が戦場において殺害したノルウェー王の息子である。この戦いにおいてデンマークが勝利を収めたがゆえに、ノルウェー王は全領地を没収される事になったのである(1.1.80-9)。この殺害されたノルウェーの息子フォーティンbrasは、ハムレットが第5幕第2場で死ぬと新たにデンマーク王の継承者となるのである。ハムレットが殺害された父の仇をクローディアスに討って本懐を遂げて幕が下りるとするならば、もう一つの復讐の成功者はフォーティンbrasと言えるであろう。やはり彼も殺された父の仇をデンマークに対して討ち、自分が新たな王として全領地を治める事になるからである。奪われた領地と共にフォーティンbrasはデンマークの領地をも手に入れる事になるのである。ハムレットの復讐とフォーティンbrasの復讐、この二つがこの作品を復讐劇とする要素になっているのである。²

復讐を実行する背景には様々な不透明要素があると言えるであろう。この劇

が始まる第一声を考えてみよう。「誰だ」(“ Who’s there? ”)(1.1.1)という正体を尋ねる番兵の言葉から、この作品が始まるのである。番兵として「名を名乗れ」(“ unfold yourself ”)(1.1.2)と尋ねるこの様子は、存在の不確かさを表すものであり、不透明性を印象付ける書き出しであると言える。そしてこの第1幕第1場の場面は深夜12時ごろという真夜中であり、この時間設定も漆黒という時間帯であり、不透明性を表すのは十分な状況設定なのである。

存在の不確かさを印象付ける書き出しから始まって、深夜という暗闇の不透明性の中に現れるのが、またもや存在するかどうか分からない、先王の亡霊という不透明な存在なのである。結果的に亡霊の言葉を信じて一連の行動を取っていくハムレットであるが、果たして亡霊は信頼できるものと言えるのであろうか。亡霊の言葉を信じたがゆえに命を落とす事になったとも言えるのである。しかし、亡霊に出会い、その言葉を信じ、復讐の誓いを立てる以前にもハムレットはデンマークの治世に疑いという不透明な感情を抱いていたのは明らかである。父の亡霊から彼がクローディアスに謀殺された事を聞かされた時のハムレットの台詞をここで引用してみよう。彼は亡霊の説明の後、「おお我が心の予感に誤りはなかった / やはり叔父が」(“ O my prophetic soul! / My uncle! ”)(1.5.40-1)と述べるのである。叔父クローディアスが不正に王位を手に入れたのではないか、という疑いという不透明な感情に身をおいていたのが分かる発言である。

不透明な感情の最中であってハムレットは真実を知りたがっていたと言える。次のハムレットの発言をここで引用してみる事にする。

Seems, madam? Nay, it is, I know not ` seems '.

`Tis not alone my inky cloak, good mother,

Nor customary suits of solemn black,
Nor windy suspiration of forced breath,
No, nor the fruitful river in the eye,
Nor the dejected haviour of the visage,
Together with all forms, moods, shows of grief,
That can denote me truly. These indeed seem,
For they are actions that a man might play;
But I have that within which passeth show—
These but the trappings and the suits of woe. (1.2.76-86)

見えるですって、母上！いいえ真実なのです。「見える」とは知りません。
この私の黒い上着だけではないのです、母上。

しきたり通りの厳粛な喪服も、
不誠実なわざとらしいため息も、
いや、目にあふれる涙の川も、
落胆した顔の表情も、
その他全ての形、外面的な様子、悲しみの表情、
それは私の真実を表していないのです。それらは実のところ、
人間が演じる事のできる行動だからです。
私は見せかけを越えるものを感じている。
これらの見せかけは虚飾と悲哀の仕着せに過ぎません。

疑いという不透明な感情の中でハムレットが望むものは、真実の露見である事がよく分かるのではないだろうか。外面という見せかけではなく、真実をハムレットは望むのである。

真実を暴くためにハムレットが行った事は何であろうか。それは「たとえどんなに奇妙でおかしい振る舞いをして / なぜなら今後こうしようと思うのだ / つまりわざと気ちがいじみたふりをするとしても」 (“ How strange or odd soe'er I bear myself / As I perchance hereafter shall think meet / To put an antic disposition on — ”) (1.5.177-9) とハムレットの事で何かを知っているそぶりは見せないで欲しいと仲間に頼む事によって演技する事である。いわば演技という虚飾によって真実を見出そうとするのである。

ハムレットの台詞には相反する要素を持つのが特徴的である。先に説明した「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」においても正反対の概念が挙げられているし、ハムレットが登場して初めて発する台詞も「親族より近いが、心情は遠い」 (“ A little more than kin, and less than kind ”) (1.2.65) という関係は近いが気持ちの隔たりは大きいという遠近の相反する概念が同時に述べられているのである。この発言に当惑して³「どうしたというのだ。お前の顔にかかる雲は」 (“ How is it that the clouds still hang on you? ”) (1.2.66) と尋ねるクローディアスに対しての返事も「私はあまりにも日を受けている」 (“ I am too much i'th' sun ”) (1.2.67) と答え、⁴クローディアスの好意が度を越えている事をほのめかすハムレットである。本来ならば好意は喜ばしいものであるのに、ここでもハムレットは「あまりにも」という否定の言葉を使い、好意のプラス面の意味を打ち消しているのである。つまり良い事と悪い事の並置という相反する意味を同時に答えているのである。

このように相反する要素を特徴として持つハムレットであるが、演技による真実の発見の方法も、嘘によって真実を見抜くという事であり、ここでも相反する要素が特徴的なのである。亡霊の言葉の真偽を確かめるためにハムレットがクローディアスに行ったのも『ゴンザーゴ殺し』という芝居を役者たちに

演じさせ、クローディアスの老ハムレットの殺害を想起させた事である。つまりこの芝居という架空の話によってハムレットは亡霊の話が真実であると判断したのである。虚構によって実相を掴んだ瞬間であると言えるであろう。「こうなったら亡霊の言葉は / 値千金の価値がある」(“ I’ ll take the ghost’s word for a / thousand pound ”) (3.2.270-1)と判断したハムレットは、真偽のほどが分からない状態から確信に至るといふ、不確定なものから確かなものへの変化があったのである。亡霊の話が真実であると確信したハムレットは、復讐の正当性を決意したのである。復讐の意味は真偽の判断により明確になり、不透明な状態から明らかな状態へと変化したと言えるであろう。作品冒頭で先に長い引用で示した真実の露見を望んだハムレットは、(1.2.76-86)自らの判断により真実を見出したと考えるようになったのである。結果的に決意した復讐の本質は、不透明から確信という明らかなものへの変化と言う事ができる。

そして復讐の背景となる亡霊の出現が深夜という不透明から始まり、ハムレットが復讐を遂げ自らの死によって幕が下りる最終場面では、フォーティンbrasがポーランドから凱旋して帰ってくるという昼間の時間帯である。いわば明るみの状態なのである。復讐の背景が深夜という暗闇であり、復讐の成就が昼間という明るみは、ハムレットの心情と共に不透明から明るみへの変化と言う事が出来るであろう。ハムレットの心情や劇の状況設定は、復讐の成就によって明るみへと変化するのである。これが復讐の本質である。

2. 第3幕第1場57行の解釈

全てのシェイクスピアの台詞の中で最も有名なものは「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」(“ To be, or not to be—that is the question ”) (3.1.57)である事に異論はないであろう。この部分の訳については様々な

解釈があり、小田島 雄志の訳によると「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ」(110)である。そして現代の古典とも言える福田 恆存の訳によると「生か、死か、それが疑問だ」(84)となっている。この二通りの訳の違いは、(“ To be ”) を存在と考える場合に生、その否定を死とする場合と、(“ To be ”)を「積極的」(“ positive ”)、その否定を(“ passive ”)と考える場合の差となっている。この部分の訳の違いはテーマと関わってくる重要な要素であり、ここではそれについて論じてみたいと思う。はじめに言葉とその対象の関連性に注目した言語学的な批評をここで紹介したいと思う。

The meaning of the word is the reality, of whatever kind, for which the word stands. Meaning, therefore, is a relational fact between language and reality, such that to ask for or to give the meaning of any word is to ask for or to give what that word designates. (Weitz 217)

言葉の意味はどんな種類であれ、その言葉が表す存在である。意味はそれゆえ、言語と現実の間関係的な問題である。つまりいかなる言葉についても意味を求め与える事は、その言葉が指示するものを求め与える事なのである。

ウェイツの言葉を発展させるならば、その言葉に解釈の余地があるならば、指し示すものにも違いが現れるという事であり、この事は先ほど述べたテーマの違いとも関わってくるのである。意味の違いがテーマの違いを生むと言う事があるからである。この箇所の意味の違いは作品全体の意味の違いを生む重要性を持っているのである。

ここで証明しようするのはこの第3幕第1場57行の訳は福田訳の路線と同じく「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」というのが適切であると説明する事である。なぜなら積極性の問題よりもハムレットの死についての態度が重要性を持っていると考えるからである。第1節で示したようにハムレットの復讐という行動の本質は不透明なものから明るみへという変化であった。判断によって迷いは消え、復讐の正当性を信じるに至ったのである。この台詞の段階では迷ってはいるものの、迷いが消えた後のハムレットは死について特別な態度を取るようになる。生と死の迷いを持っていたハムレットは最終第5幕において「覚悟が大切。なぜなら誰も / 捨てるべき命について何も分らないのだ。早く捨てる事になっても、構わない」(“The readiness is all. Since no man knows / aught of what he leaves, what is't to leave betimes? Let be”) (5.2.169-70) と死についての迷いを払いのけているのである。この事はロバート・ワトソン(Robert Watson)が述べる「ハムレットは何かを表す人物であるが、しかしまるで彼の悲しみはたった一つのベクトルによって完全に和らげられるようでもある。つまり、それは死の嘆きであり、自身の死の自覚である」(“Hamlet will prove representative, but it is as if his grief were entirely subsumed by a single vector of mourning, the awareness of one's own death”) (102) という死についてのはっきりとした意識と言えるであろう。死への特別な態度とはハムレットの場合、恐怖心を乗り越えてその重大性を重大と考えない態度と言えるであろう。死についての重大性と恐怖を脱ぎ捨てたハムレットは、自身についての死のみならず、恋人の父の死についても自分が殺害してしまったという恐怖を脱ぎ捨てているのである。誤って殺した恋人の父ポローニアス(Polonius)についてハムレットは以下のような言を述べている。

For this same lord,
I do repent. But heaven hath pleased it so,
To punish me with this, and this with me,
That I must be their scourge and minister.
I will bestow him, and will answer well
The death I gave him. . . . (3.4.161-6)

この老人には
申し訳なく思う。しかしこれも天の御心、
この男で私を罰し、私によってこの男を罰したもうたのだ。
私は天の振るう鞭であり、代理人。
死体は片付けよう。そして満足のいく責任を負うつもりだ、
私が彼を殺した責任について。……

自分が殺したポローニアスについてもこれを天の御心としているハムレットである。これはちょうど「特別な / 摂理が働いているのだ。一羽の雀が落ちるのにも」 (“ There’s a special / providence in the fall of a sparrow ”) (5.2.166-7) と考えたのと同じであり、死を起こるべき運命として受け入れているハムレットの姿を見出す事が出来るのである。恋人の父親の殺害についてでさえ、過敏な反応は示さず運命として受け入れているハムレットは、自分の復讐という行動に絶対の正当性を信じているからに他ならない。これは自身の生と死の迷いが消えた結果、他人の死についても迷いが消えた結果と言えるであろう。

死への恐怖を乗り越えたハムレットには後に相応しい死が待っている。自分が殺害したポローニアスの息子レアティーズ (Leaertes) との剣の試合によっ

て命を落とす事になるハムレットであるが、レアティーズに対してのハムレットの言葉は、「紳士」(“gentleman”) (5.2.173)であり、「自分の兄弟」(“my brother”) (5.2.189)である。そして剣の試合の前のハムレットのレアティーズへの挨拶は敬意に溢れていると言えるであろう。「私がした事は / 君の父への感情を傷つけ、名誉を汚し、嫌悪を / ひどく呼び起こしたかもしれない」(“What I have done / That might your nature, honor, and exception / Roughly awake”) (5.2.176-8)と相手に対して親密さと敬意を同時に表現しているのである。レアティーズに対してのハムレットの評価はすこぶる高い事が分るのではないだろうか。⁵そして愛情と敬意を抱くレアティーズからポローニアス殺害の許しをもハムレットはもらうのである。

「互いに許しあいましょう。気高いハムレット様 / 私の死と父の死があなたの罪にならないよう / あなたの死が私の罪にならないよう」(“Exchange forgiveness with me, noble Hamlet. / Mine and my father's death come not upon thee, / Nor thine on me”) (5.2.282-4)というレアティーズの許しは、愛情には愛情に、そして敬意には敬意で応えた結果の言葉である。ハムレットの死は悲劇的な事かもしれないが、その最後の死に様は望ましい人物によって命を取られ、そしてその人物から愛情と敬意を示された状態の中での死なのである。ハムレットの死は決して惨めな死とは言えないのである。

ハムレットがまさに命尽きようとする時に発する言葉というのは、自分の亡き後に国を治めるのはフォーティンbrasであるべきという政治の話である。王位を継ぐ者としてのハムレットがまずはじめに考えなければならないのは当然、国の政治であり、最大の重要性を持つものである。この瞬間にハムレットは個人の復讐を超えた治世を第一に考えており、その契機になったのは自らの死である。自分の死がハムレットに王位継承者としての意識を、瞬間的ではあ

るが、目覚めさせたと言える。本来の王族のつとめが死によって目覚め、この意味でハムレットにとって、自らの死が重要な事であったと言えるのである。

(*" To be, or not to be—that is the question "*) (3.1.57)の解釈が積極性についてのものではなく、生きるか死ぬかの悩みが適当である、という論旨でここまで説明してきたが、ハムレットが死への恐怖を乗り越え、自分の死だけでなく他人の死に対しても動揺を示さなくなり、自らの正当性を信じて計画を実行していく姿を考えるならば、やはりこの部分の解釈は、生死に関わる悩みと考えるのが適当なのではないだろうか。悩みが消えた後のハムレットの死についての意味づけも、つまり惨めな死ではなくレアティーズに殺される名誉ある死である、という事を考えたならばハムレットに生死の悩みを前もって行わせるというのは、劇の性格上、結末の伏線になっていると考えるのが相応しいのである。そして個人の恨みを越えて王族の意識を最後に呼び起こす死は、ハムレットを名誉の悲劇的人物とする材料であり、この意味でも生と死の迷いは、結末の伏線になっているのである。つまり、(*" To be, or not to be—that is the question "*) (3.1.57)の解釈は「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」が相応しいのである。

結論

マーガレット・ファーガソン (Margaret Ferguson) はハムレットと死の関係について「本当の意味で死の警告を理解するためには、人は少なくともいくらかは人生についての愛を持っていなければならない。この世でもあの世においてでもである。ハムレットはこの愛を欠いているのである」(*" For truly to understand a memento mori, one must have at least some love of life—on earth or beyond. And Hamlet lacks this love "*) (150)

と述べているが、ハムレットはこの世においてもあの世においても持っているものは絶望だけなのだろうか。何も実現しないのだろうか。

本稿第1節で明らかになったのは、ハムレットの復讐の本質は不透明なものから明るみになることであり、劇の時間帯も夜からはじまり昼間に終わるといふ、暗いものから明るみになるというものである事を説明した。第2節では第3幕第1場57行の解釈は「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」が適切であり、ハムレットにとって死が必要なものである事を説明した。

「はじめに」の部分で示したジャルダン、リッツ、ブラッドショーの3人の批評家はハムレットの悩みの本質は現在にあると説明していた。ハムレットの悩みの本質である現在は、彼の一連の行動の結果によって未来を感じさせる解決を何かもたらさないだろうか、というのが本稿の論題であった。ハムレットが実現した未来に続くものは一体何なのであろうか。第1節の結論、不透明なものから明るみへ、と第2節の結論、第3幕第1場57行の解釈が「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」の解釈になるべきに必要なであったハムレットの死をまとめると、復讐の結果としてのハムレットの死は何か明るみへ、という未来的な意味を帯びてこないだろうか。自身の運命を嘆いていたハムレットは復讐の決意とともに自身の正当性を強く信じるに至る。そこには王位を不正に奪ったクローディアスに対してのハムレットが考える良心の罰を与えようとする意識が働いているのである。老ハムレットの人格の立派さを述べ、現王クローディアスの卑小さをそれと比べて、母の早すぎたクローディアスとの再婚を嘆いていたハムレットである。自分の父である老ハムレットは、ハムレットにとって尊敬できる人物だったのである。ハムレットの死によって老ハムレットとの関連性が何か出来上がらないだろうか。

ハムレットの死は現王クローディアスの不正を暴き、自分亡き後の治世もフォーティンブラスに任せるといふ未来を期待させるものである。奪われた王位

の不正が明るみに出ること、つまり政治の膿が出ることで、治世は再び先代と同じように良いものになる事が予想されるのである。政治の膿を露にするきっかけとなったハムレットの復讐は、死という最後にもかかわらず、その正当性には十分な理解を読者は示すことが出来るのではないだろうか。ハムレットの死は名誉の死と考える事が出来、先王の名誉ある治世との関連性を見出す事が出来る。そしてハムレットの行動の結果による、次世代のフォーティンブラスの治世は不正の取り除かれた望ましいものになる事が予想されるのである。⁶ この点でも先代老ハムレットの治世と共通項を見出す事が出来るのである。劇の不透明から明るみへという特徴、ハムレットの名誉ある死などを考えてもハムレットが復讐の結果実現したのは、未来に語られる自身の栄誉と将来の望ましい治世という老ハムレットとの共通項なのである。本稿がキーワードで挙げた未来という言葉は、ハムレットの未来に続く栄誉と望ましい将来の治世という二つの事柄について当てはまるのである。これがハムレットの死によって実現した事であり、本稿の問いに答える結論である。

400年前に作られた『ハムレット』の教える教訓は、これからも人々の心をとらえ続け、世界中で脚色、翻案されながら上演を続けるであろう。現在における研究の世界でも、シェイクスピアの研究者が最も多く、そして最も研究の進んでいる分野であるという事を考えるならば、シェイクスピアが現代的意味を持っているのは疑いようがない事実である。シェイクスピア学者とシェイクスピア研究が飽和状態になっているという議論が度々聞かれるが、シェイクスピアはまだまだこれからも研究者を呼び続け、研究を呼び続ける作家である事に間違いはない。

註

1. 以下『ハムレット』からの引用はThe Oxford Shakespeare シリーズ Ed. G. R. Hibbard の *Hamlet* に拠る。引用箇所は第1幕第1場1行を(1.1.1)の様に表す。
2. 主人公ハムレットが命を落とすきっかけとなったレアティーズとの剣試合も父を殺されたレアティーズのハムレットに対する復讐と考えるならば、これも復讐劇の一つの要素である。
3. ここではハムレットの発言に当惑したクローディアスと考えるが「親族より近いが、心情は遠い」というハムレットの台詞は傍白と考える編集者が多いようである。しかし、筆者はクローディアスを困らせる事を意図して聞こえる事を前提とした発言と考える事にする。
4. (“ sun ”)は文字通りの意味はここで訳出したように日の光である。しかし、当然のことながら「息子」 (“ son ”)も掛詞として意味している。これを考えるならば、クローディアスの義理の息子となるハムレットへの強すぎる好意が明らかになってくる。
5. 訳出した底本の差によるものであるが、白水社、小田島 雄志の翻訳にはもっと明らかに「あの男の美点はそのようにほめことばを浴びせてもいささか減るものではない」(228)や「あれほどの天分の持ち主はまれだ。だから正直言って、あの男に匹敵するものを求めれば鏡にうつるその姿においてほかにあるまい。あの男のまねができるのはその影だけだ」(229)とハムレットによるレアティーズに対しての高い評価がはっきりと述べられている。
6. 陰謀の直接の関係者ではないが、ハムレットの母ガートルードが死ぬ事によって、夫クローディアスの死を嘆く必要がなくなり、そして復讐が新た

な復讐を呼ぶ可能性がなくなった事も、不安要素の完全な消失と考えられる。この意味でもフォーティンブラスの新たな治世は、新規まき直しの白紙の状態であり、汚れが残っていない。

引用・参考文献

- Bohannon, Laura. "Shakespeare in the Bus." *Critical Essays on Shakespeare's Hamlet*. Ed. David Scott Kastan. New York: G. K. Hall, 1995. 9-18. Print.
- Bradshaw, Graham. *Shakespeare's Scepticism*. Ed. Graham Bradshaw. Ithaca: Cornell University Press, 1990. Print.
- Ewbank, Inga-Stina. "Hamlet and the Power of Words." *Critical Essays on Shakespeare's Hamlet*. Ed. David Scott Kastan. New York: G. K. Hall, 1995. 56-78. Print.
- Ferguson, Margaret W. . "Hamlet: letters and spirit." *Critical Essays on Shakespeare's Hamlet*. Ed. David Scott Kastan. New York: G. K. Hall, 1995. 139-155. Print.
- Jardine, Lisa. "No offence I'th'world: Hamlet and Unlawful Marriage." *Critical Essays on Shakespeare's Hamlet*. Ed. David Scott Kastan. New York: G. K. Hall, 1995. 258-271. Print.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. Ed. G. R. Hibbard. New York: Oxford University Press, 2008. Print.
- Watson, Robert N. *The Rest is Silence: Death as Annihilation in the English Renaissance*. Ed. Robert N. Watson. Berkeley: University of California Press, 1994. Print.
- Weitz, Morris. *Hamlet and the Philosophy of Literary Criticism*. Ed. Morris Weitz. Chicago: The University of Chicago Press, 1964. Print.

Welsh, Alexander. "Hendiadys and Hamlet." *Hamlet in His Modern Guises*. Ed. Alexander Welsh. Princeton: Princeton University Press, 2001. 79-105. Print.

Welstine, Paul. "The Textual Mystery of Hamlet." *Hamlet in His Modern Guises*. Ed. Alexander Welsh. Princeton: Princeton University Press, 2001. 210-241. Print.

小田島雄志訳. 『ハムレット』東京:白水社, 2003年. Print.

福田恆存訳. 『ハムレット』東京:新潮社, 1995年. Print.